



# オアシス

文責：副学長  
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2022年3月28日発行 第47号

3月の春分の日、太陽が赤道に位置することを意味し、昼と夜の長さがほぼ同時間になることにもなります。春の訪れがいよいよ本格的になり、桜の開花も待ち遠しくなります。一方で花粉や黄砂の飛来が重なる時期でもあります。季節の変わり目は、何かと体調が崩れやすくなります。本アカデミーでは幼児科、本科の各講座のまとめとして4月のファミリーコンサートが控えていますので、健康管理に万全を期しながら有終の美を飾っていただきたいものです。

## ◎ 『出雲の春音楽祭 2022』の開催が実現す！

コロナ感染症による第6波が猛威を振るっていたために、開催が危ぶまれていました。しかし、島根県にも発動されていた「まん延防止等重点措置」が解除され、同時に練習も再開できたことからギリギリの線で公演に間に合うことが出来ました。約1ヶ月もの間、各講座も中止されていたことから、練習不足は否めませんでした。出演者の公演に向けての熱意が勝り、日を追うごとにレベルの向上が見られ出雲の音楽に対する底力も見ることのできた一時でした。以下、プログラム順に公演の様子を紹介します。

### 【第1部】指揮：畑山洋平、演奏：出雲フィルハーモニー・フェスティバル邦楽合奏団

本アカデミー別科「邦楽コース」のメンバーが中心となり編成された合奏団です。最初に演奏されたのは、日本に古くから歌い継がれている「さくら」「通りゃんせ」「江戸子守歌」の3曲をメドレーにした「箏のしらべ」を箏（琴）8竿と17絃により、日本古曲の哀愁漂う表現を繊細なタッチで演出されました。

2曲目は、何とラテン音楽に挑戦され、「箏 Mambo」をラテン打楽器と共にリズムカルに演奏される様子は、箏という邦楽のジャンルを超えた新たな音楽の可能性が垣間見えた瞬間でした。



### 【第2部】指揮：中井章徳、ソプラノ：吉川真澄

#### 演奏：出雲フィルハーモニー・フェスティバル交響楽団

1曲目は、ベートーヴェン作曲、歌劇「フィデリオ」序曲を勇ましく、一方で軽快な表現を織り交ぜながら、古典派独特のオーケストレーションが楽しめました。この曲は、ホルンの活躍が目立ちます。難しいフレーズをサラリと演奏される姿にプロ意識の高さを感じました。

2曲目は、平野一郎作曲、「交響神楽 間奏曲」《湖》の世界初演が、管弦楽とソプラノ独唱により上演されました。この曲の構成は、出雲地方の「湖」（宍道湖・中海・神西湖）の様子を、1



裏面へ

年12月に区切り、1ヵ月を1分で演奏し、12分で完結する仕組みです。睦月（1月）の凍える静かな場面から始まり、自然の息吹を感じながら湖に生息する様々な生き物が登場するなど、その場面がよく感じられ、師走（12月）の冬へと再び静かに閉ざされるまで、神々の国出雲の神秘的な感覚を巧みな技で表現されていることに感動しきりでした。また、ソプラノ歌手も特に歌詞はなく楽器の一員としての登場がより神々しく「交響神楽」の印象を一層高める要因となっているように思えました。

**【第3部】指揮：中井章徳、演奏：出雲フィルハーモニー・フェスティバル交響楽団  
出雲フィルハーモニー・フェスティバル合唱団**

頌歌『天地のるつぼ』－出雲讃歌－く出雲市政施行60周年記念委嘱作品を総勢90名からなる合唱団とオーケストラによる壮大なステージが6年ぶり（4年前はピアノ版による）に上演されました。2001年に産声を上げてからおよそ20年間歌い継がれていることは、大岡信氏による作詩と鈴木輝昭氏による作曲が、心の通う、まさに魂を揺さぶられる作品であるからに尽きるような気がします。ふるさと出雲が誇りに思える讃歌が存在することの意義を改めて強く感じました。



観客の皆様から大きな拍手をいただき、それに応えるアンコールでは、バッハ作曲の「主よ 人の望みの喜びよ」のメロディーが流れると、現状の世界情勢から平和への祈りやコロナ禍による不安定な市民生活が1日も速く収束できるよう祈りが込められたように感じられ、厳粛な演奏で幕が閉じられました。

### つぶやき

今回「出雲の春音楽祭 2022」のプログラムでは、日本固有の感覚である「もののあわれ」を強く感じました。それは、四季折々の季節感を感じ、人々が季節ごとの虫の声や鳥のさえずりを楽しみながら詩を詠む、日本人独特の生活感です。ここ、出雲においては「神話」という物語が古代から脈々と受け継がれ、出雲文化という形で、他地域には見られなくなった文化が残っています。

邦楽合奏からは、日本人の心や魂が感じられ、間奏曲《湖》では、出雲の地が神話の舞台と重なり、自然の豊かさを彷彿とさせる場面を想像させていただきました。《出雲讃歌》は、出雲の風土が余すところなく取り入れられ、地元に住む人々に改めて出雲という地域の素晴らしさを感じさせていただく頌歌（ほめうた）となっていることに気付かされます。

そこにベートーヴェンの序曲が挟まれていることに、おや!?!と不思議に思われる方も多いのではないかと思います。自分なりに解釈をしますと、大作曲家が熟慮のうえにも熟慮を重ね、何年もかけて出来上がった歌劇「フィデリオ」は、200年経った今でも新しい発見があるなど、曲の重みの違いを感じさせてくれます。要するに奥の深いものは残り、クラシック音楽の所以につながる事になるのではないのでしょうか…。出雲讃歌は20年が経ち、ようやく芽吹き始めました。交響神楽は、新しい感覚で戸惑いもあるかも知れませんが、きっと末永く世に残る作品と思われれます。こうなると「國譲」がますます楽しみとなります！

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】